

鈴木孝夫著

ことばと文化



鈴木孝夫 著

ことばと文化

岩波新書

858

鈴木孝夫

1926 年東京に生まれる

1947 年慶応義塾大学医学部予科卒業,

1950 年同大学文学部卒業

専攻一言語社会学

現在一慶応義塾大学言語文化研究所教授

著書一本書の中に引用言及した諸論文の他に,「閉された言語・日本語の世界」(新潮社,昭和50年)「ことばと社会」(中央公論社,昭和50年),「ことばの人間学」(新潮社,昭和53年)「武器としてのことば」(同,昭和60年),「日本語と外国語」(岩波新書,平成2年),さらに本書の英訳版 'Words in Context' (講談社インターナショナル,昭和59年) などがある

ことばと文化

岩波新書(青版) 858

1973 年 5 月 21 日 第 1 刷発行 ©

1992 年 3 月 5 日 第 35 刷発行

著 者 すず 鈴 き 木 たか 孝 お 夫

発 行 者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式 岩 波 書 店

電話 03-3265-4111(案内)

定価はカバーに表示してあります

印刷・理 想 社

製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

ISBN 4-00-412098-5

まえがき

文化ということばには、いろいろな意味や使い方があつた。一般の人々はこのことばを、何等かの意味で文学、音楽、絵画といった人間の芸術活動に結びつけて理解することが多いようだ。また文化国家、文化人、文化的な生活のような表現から、何か香り高い格調のあるものとして文化を考える人も少なくないと思う。

しかしこの本の中で私が文化と称するものは、ある人間集団に特有の、親から子へ、祖先から子孫へと学習により伝承されていく、行動及び思考様式上の固有の型(構図)のことである。文化をこのようなものとして把えることは、今や言語学や人類学の領域では常識となっている。たとえば日本人は自分のことを言う場合に、人指ゆびで鼻の先をさすようなことをする。これに反し、多くの西欧人は親指で胸のあたりを突くような動作をする。この二つの異つた行動様式は文化の違いを示しているというふうなのである。つまり文化とは、人間の行動を支配する諸原理の中から本能的で生得的なものを除いた残りの、伝承性の強い社

会的強制(慣習)の部分をさす概念だと考えて頂いてよい。

ところが人間の言語活動の大部分にも、このような文化の定義があてはまる。

人は生れ落ちたときには唯泣くだけである。しかし成長するにつれて、ことばを話すようになる。そして具体的にどの言語を、どのように話すようになるかということは、彼をとりかこむ人々に全く依存しているのである。

この本の目的は、ことばというものが、いかに文化であり、また文化としてのことばが、ことば以外の文化といかに関係しているかを、できるだけ平易なことばで明らかにすることにある。

言語の問題に関心が高まっている現在、ことばについて書かれたもの、殊に言語学の専門書解説書のたぐいにはすぐれたものが決して少なくない。しかしことばの問題に興味を持ち、ことばの秘密、言語のしくみを深く知りたいと願う一般の読者が気軽に手にし、いつのまにかことばの不思議さ面白さのとりこになるような入門書となると、手ごろなものは余り多くないようである。

私はこの小冊子を、このようなことばの研究の入門書の一つとして役立てて頂ければと思

っている。ただ一つおことわりしておきたいことがある。それは、私の考えではいかなる学問領域の入門書でも、それは既に知られているさまざまな事実の単なる羅列ではあり得ないし、またそうあつてはならないということである。

入門書とは、その学問特有のものの見方を示すものでなければならぬ。そしてものの見方とは、動的な精神の働きに他ならないのであるから、入門書はそれを書く著者に固有な、ものの見方と切り離すことができない。この意味で、私はこの本の中でためらうことなしに、私個人の、ことばというものについての考えを、私独特の方法と具体例を用いて、かなり大胆に展開してみたのである。したがって、もし偶然に専門の言語学者、文化の研究にたずさわる方々がこの本を手にした場合には、思い切った批判を何等かの形で聞かせて頂ければ幸であると思っている。

昭和四十八年四月十日

慶応義塾大学言語文化研究所にて

著 者

目次

まえがき

一 ことばの構造、文化の構造 一

共時的展開と通時的展開(二) 文化の項目と普遍的価値(四)

breakとはどういうことか(六) ことばの構造性と辞典の記述(八)

「のむ」とdrinkの構造の比較(一〇) breakの構造的な記述(一二)

あらわな文化 かくれた文化(一五) It never rains but it pours.(一六)

A rolling stone gathers no moss.(一三)

二 もの(こと)とことば 二七

もの(こと)とことばの対応関係(二七) ことばがものをあらしめる(二九)

ことばの分節性と虚構性(三一) 言語的相対主義(三四) ことばの

分節性が世界を秩序づける(三八) lipと「くちびる」(四〇) こと

ぼのレベルと理解のレベル(四四) 指示対象のあいまい性(四六)

指示対象の領域のくいちがい(四八) 顔の描写法と文化的選択(五二)

西洋人の顎(五四)

三 かくれた規準……………五九

形容詞の内容の相違(五九) 相対的形容詞と絶対的形容詞(六一)

潜在的比較文と明示的比較文(六五) 一種の規準(六七) 二比率

規準(六八) 三期待規準(七〇) 四適格規準(七二) 五人形ひとがたの

規準(七四)

四 ことばの意味、ことばの定義……………八三

音と意味(八三) 辞典はことばの意味を説明しない(八五) 「石」と

はなにか(八七) ことばの意味(九〇) (一)音と結合した個人の知

識体験の総体(九三) (二)ことばの意味はことばでは伝達不可能(九五)

ことばの定義(九五) 辞典で「石」を定義する必要はない(九六)

名詞より動詞・形容詞の方が定義しやすい(二〇〇)

五 事実の意味を与える価値について……………一四五

日本人は残酷か(二〇五) 日本の犬と西洋の犬(二〇九) 「西欧に見

習え」(二二三) 日本と西洋における動物観(二二五) 価値体系を無

視した概念の輸入(二三三) 日本語をはかる尺度は日本語自体(二三七)

六 人を表わすことば……………二二九

1 自分及び相手をなんと言うか……………二二九

自分をなんと称するか(二三二) 相手をなんと言うか(二三三)

2 ヨーロッパ語の人称代名詞の歴史的背景……………二三五

ヨーロッパの言語は兄弟関係(二三五) 同一性の連続(二三六)

3 日本語の人称代名詞の歴史的背景……………二四〇

人称代名詞の変遷(二四〇) タブー型変化(二四四)

一 ことばの構造、文化の構造

共時的展開と
通時的展開

数年前のことになるが、私は米国人の言語学者T氏と東京で親しくなった。

彼はもともとはアメリカ・インディアン言語を専門に研究していたが、終戦後の日本に、軍人として駐留していたこともあって、最近では日本語の歴史や方言にも興味を示しはじめ、遂に奥さんと三人の娘をつれて東京にやって来たのである。奥さんはイタリア系の人で、小学校の先生をしている。

彼は古い日本家屋を一軒借り、畳に座蒲団、冬は炬燵に懷炉、そして三人の娘を日本の学校に入れるという、一家あげての見事な日本式生活への適応ぶりだった。

或る日、アメリカの学者の習慣として、彼は多くの言語学関係の友人知人を、家に招待した。まずイタリア風のイカのおつまみなどで、カクテルを済ませた後、別室で夕飯ということになった。一同が座につくと、テーブルには、肉料理やサラダなどが並べられ、面白いこ

とに、白い御飯が日本のドンブリに盛りつけて出されたのである。

畳の上に座っていること、白い御飯であること、T氏たちが日本式生活を実行していることなどが重なり合って、一瞬私は、この御飯を主食にして、おかずを併せて食べるのだという風に思ったらしい。目の前の肉の皿を取上げて、隣の人に廻そうとしかけた時、私はT夫人が、かすかにとまどったような気配を感じた。

間違ったかなと思った私は、御飯は肉と一緒に食べるのか、それとも御飯だけで食べるのかと尋ねると、夫人は笑いながら、先ず御飯を食べて下さいと言う。

私はその時、はっと気が付いた。この御飯は、イタリア料理では、マカロニやスパゲッティと同じく、スープに相当する部分なのだ。

はたして、それは油と香辛料で料理した、一種のピラフのようなものだった。

食事というものは、いろいろな条件に制約された、文化という構造体の重要な部分である。何をいつ食べるか、それをどう食べるか、食べていけないものは何かといったことに関して、どの国の食事にも、さまざまな制限や規則が習慣として存在する。

カトリック教徒は金曜日には獣肉を食べないし、イスラム教徒は、豚肉を不浄なものとし

1 ことばの構造、文化の構造

て決して食へないというようなことは、誰でも知っている有名な事実であろう。

しかしこのように、何かを食べてはいけないという明示的な規則は、外国人にも比較的判りやすい。ところが自分の国の食物と同じものが、外国の食事の中にありながら、その食物と他の食物との関係が、自国の食事の場合と違うという、つまり同一の食物の食事全体における価値が、文化によって異るときに、難かしい問題がおきるのである。

白い米の飯は、日本食の場合には、食事の始めから終りまで食べられる。というよりは、米飯だけを集中的に食べることは、むしろいけないこととされている。おかずから御飯、御飯からお汁と、あちこち飛び廻らなければ、行儀が良いとは言えないのである。

そこで米の飯と他の食物との、日本食における関係は、並列的・同時的であると言えよう。お汁に始まり、香の物に至るまで、米を食べてよいのである。

ところが、食事の一段階ごとに、一品ずつの食物を片付けていく、通時的展開方式の性格の強い食事文化もある。西洋諸国ではこの傾向が強く、イタリアの食事も例外ではない。ここでは麺類や米の料理などは、ミネストラと称して、本格的な肉料理が始まる前に、済ませしてしまうのだ。

私がドンブリに盛られた白い御飯を見て、おかずも一緒に食べようと思った失敗は、日本の食事文化に存在する或る項目を、別の食事文化の中に見出したため、これを自分の文化に内在する構造に従って位置づけ、日本的な価値を与えようとしたことが原因なのであった。

文化の単位をなしている個々の項目（事物や行動）というものは、一つ一つが、他の項目から独立した、それ自体で完結した存在ではなく、他のさまざまな項目との間で、一種の引張り合い、押し合いの対立をしながら、相対的に価値が決っていくものなのである。

自分の文化にある文化項目（たとえば或る種の食物）が、他の文化の中に見出されたからといって、直ちにそれを同じものだと考えることが誤りなのは、その項目に価値（意味）を与える全体の構造が、多くの場合違っているからである。

文化の項目と
普遍的価値

一般の人は、自分の文化のこのような構造を意識もしないし自覚もしていない。そこで自分の文化に存在する項目が、それ自体絶対的な、どこでも通用

する価値を持っているように考えがちである。

この点は、ことばという、文化の重要な構成要素を正しく理解するために、極めて大切なことであるから、ことば以外の例を、もう一つだけ取上げよう。

1 ことばの構造、文化の構造

日本人が友人知人に出会った時の、一番普通な挨拶は、おじぎである。ところが、その日本人が、この頭を下げる挨拶の代りに、西洋人は一般に握手をするということを知ると、誰彼の見さかいなく握手をするようになる。つまり頭を下げる挨拶と、握手とを、互いに等しい価値を持った行動と解釈するわけである。ところが、実際には、頭を下げる日本流の挨拶を、日本人同士の間でしてもよい場合のすべてが、握手で置き換えできるわけではない。たとえば、こちらが男であつて、相手が婦人であるときは、先方が手を出すのを待つことが礼儀とされる国もある。出会った人の誰彼かまわず、こちらから握手することは、つまりぬ誤解を生むことにさえなりかねない。

以上の二つの例から言えることは、私たちが異った文化に、しかも限られた範囲で接するときは、個々の文化要素を統括する全体の構造がつかめることは稀であり、多くの場合、自分が出会う一部、または特殊な実例を、一般的に拡大してしまう傾向があるということである。しかもこの一般化は、必ず自分の文化の構造に従って行われるということが問題なのである。

私たちが外国語を学習する際にも、いま述べたような具合に、自国語の構造を自分ではそ

れと気づかずに、先ず対象に投影して理解するという方法を取りやすい。従っていろいろと喰違いが生じてくるのも当然である。

breakとはどういうことか

ごく簡単な例として、英語の break という動詞を考えてみよう。先ず、学校で「窓ガラスを割ったのは誰ですか」Who broke the window? とか「あいつスキーで足を折った」He broke his leg. などという例文から、break の使い方を学んだ中学生は、そうか覚えたぞ、break は「割る」とか「折る」という意味なんだと思ひ込む。

そこで英作文の時間に、この知識を生かして、「昨日大きな西瓜を包丁で二つに割って、それから八つに切った」というようなことを、I broke a big watermelon in two with a knife and と正しく書いたつもりになると、先生から、こじは break を使うのはおかしい、cut を使いなさいと直されてしまう。でも先生、break は「割る」んじゃないですかと言ったりすれば、それは時と場合によるので、馬鹿の一つ覚えみたいなことは駄目だよと叱られたりする。

今度は「腕を折った」から応用して、折り紙、折り目などに break を使うと、これも間違

いでfoldと言えと教えられる。

次に電気を切る機械は、ブレーカーと言い、家のヒーズ・ボックスの中にあるということ、理科の時間に習って、そうかbreakは「切る」とも使えるのだなど、英語の時間に、「釘に洋服をひっかけて切ってしまった」と言うつもりで、I broke my coat……. と言いかけると、先生はbeatと言えと言う。

ついに腹を立てた生徒が、「先生、英語は滅茶苦茶ですね。理屈も何もありやしない」と怒れば、「ことばは数学などと違って、理屈だけでは駄目です。注意深く、勘を働かせて勉強しなければ」というようなことを先生が言う。生徒が自然な推理应用能力を発揮できないという意味では、なまじ頭の良い生徒ほど、語学ができなくなるものである。

少し誇張したような話しだと思われるかも知れないが、この中学生の悩みは、実は外国語学習者に、いつまでもつきまとう本質的な悩みなのであり、大学生の書いた英作文でさえ、この種の誤りでいっぱいと言っても、決して嘘ではないのである。

どうしてこのようなことになるのかと言えば、ことばの意味や使い方には構造があつて、それが言語によって異っているという認識が、教える側に欠けているからである。